自由

古宮　九時

将来自分がどんな妃を娶るのか、意識したことはほとんどない。それは後継に関しての魔女の呪いがあったからで――だがそれを抜いても、いざ婚約した相手は予想を振り切っていた。

「オスカー、式の招待客って私も選べるんですか？」

そんな風に聞いてくるのは彼の婚約者だ。オスカーは執務室の天井に浮いているティナーシャを見上げた。

「式って結婚式のか？　不許可」

「なんで⁉　私の結婚式ですよね⁉」

「お前、自分の即位式の招待客削ってレジスに怒られたの忘れたのか？」

本音を言うと、オスカー自身も盛大に諸国から客を招いて何かをするのは好きではない。好きではないのだが、ティナーシャに任せていてはそれ以上に何かしでかされそうな気がする。

大体彼女自身、例外中の例外の存在なのだ。隣国の女王であり、四百年前から彼に会うために来た女。もうこれだけで割と意味が分からない。どうして遥か過去から生まれてもいない彼を目指して時を越えてくるのか。全てを捨てても定かでない可能性に賭けてくるその精神が、割と恐いし重い。まるで触れたものを端から溶かしてしまう熱を小柄な体に孕んでいるようだ。

ティナーシャはそんなことを思われているなどと考えてもみないのだろう。空中で自分の膝を抱えて頬を膨らませる。

「だって、ファルサス国王の結婚式ってなんか重そうなんですもん。ちょっとくらい削った方が警備しやすくないですか？」

「お前、自分の身分を言ってみろ」

「その頃には退位してますし」

手の届かないところに浮いているティナーシャは、子供のように舌を出してくる。執務机を前に仕事をしているオスカーは叱りつけたい気分をのみこんだ。

大体彼女も国主である以上、今は執務時間のはずだ。それを「確認したいことあるから」と書類を自ら持ってきて、ついでにここで浮いている。強大な力を持つ魔法士だからこそそんな自由が利くのだが、いくらなんでも自由すぎる気がする。まるで外で暮らしている猫が自分の気が向いた時にだけ餌を食べにくるようだ。

オスカーは自分には（能力的に）不可能なそんな気ままさに釣り合わない気分を覚える。書類を処理しながらぽつりと言った。

「なんで俺の妃はこんななんだろうな……」

「‼」

空中のティナーシャは大きな目をまん丸にする。意気揚々としっぽを立てて歩いていた猫が水をかけられたように、彼女はあわてて床の上に降りてきた。

「こ、婚約破棄ですか……？」

「早い」

「招待客を減らすの諦めます……」

「それが原因で婚約破棄するの、いくらなんでも俺が短気過ぎないか？」

第一、ティナーシャの方がべったりと最初からなついていたとはいえ、結婚を申し込んだのは彼の方だ。招待客の増減でそれを撤回する気はないし、もともと招待客を増減させる気もない。

オスカーは机の向こうで不安そうにしている女をじっと見返す。ティナーシャはその視線を受けて萎れた。

「ごめんなさい」

「特に謝る必要もない。問題があれば注意するだけだ。自由にしてろ」

たとえ彼女がトゥルダールの女王という出自を持っていたとしても、それを彼のために捨てたとしても、自分たちは対等だ。

だから彼女は自由であればいい。それを贈り、また御すだけの人間に自分がなればいいだけだ。

オスカーは微笑すると彼女を手招く。ティナーシャはおずおずと寄ってくると、そのまま彼の椅子の肘掛けに座った。ふわりと淡い花の香が漂う。

オスカーはそんな彼女に預かった書類を返した。

「ほら、できたぞ」

「！　ありがとうございます！」

「どうせ来るなら仕事が終わった後に来い」

「……善処します」

そう言っても彼女も多忙だ。こうしてファルサスに来ていること自体、針の孔のような時間だろう。ティナーシャは両腕を伸ばしてオスカーの頭に抱き着くと、ふっと姿を消す。

まるで猫のような将来の王妃にオスカーは微笑んで、次の書類を手に取った。